イスラムとの対話

第2回
「紛争」とイスラム

■

１９９７年９月２日（火）

於：帝国ホテル

主催：笹川平和財団

■

目 次

田淵節也・笹川平和財団会長挨拶 1

第１部　小杉教授の講演 2

はじめに 2

脅威・紛争のパーセプション 2

脱冷戦後の敵？ 3

挑戦者としてのイスラム 3

ネガティブな近代と黄金の中世期 3

近現代の中東－３つのベクトル－ 4

イスラム法の復活・再適用 5

近代型のイスラム－イスラム銀行－ 5

宗教革命 6

民族主義との対立 6

急激なシステム変容－不安定化・矛盾の蓄積 6

文明の重心の移動 7

イスラム復興の可能性／中道派の勝利と対話型改革が道を開く 7

第２部　質疑応答 9

付　録（小杉教授講演レジメ） 15

講師：小杉泰（こすぎやすし）**教授**
プロフィール

1953年生まれ
エジプト国立アズハル大学イスラム学部卒業
専攻はイスラム学、中東地域研究
現在、国際大学大学院国際関係学研究科教授

モデレーター：池田明史（いけだ あきふみ）
助教授プロフィール

1955年生まれ
東北大学法学部卒業
アジア経済研究所、イギリス･イスラエル留学を経て、
現在、東洋英和女学院大学社会学部助教授

田淵節也・笹川平和財団会長挨拶

本日はご多忙中、朝早くにもかかわらず、当朝食会においでいただきありがとうございます。日頃から笹川平和財団の事業に対し、深く関心を傾けていただきましてありがとうございます。おかげさまで当財団は昨日11周年の記念日を迎えました。次の10年間に向けて心新たに事業を行っていく所存でございます。

なお、これも皆様のご協力のたまものであることは申すまでもないことでございます。

さて、10周年を記念して始めた新しい試みのうち、このイスラム朝食会は、おかげさまで順調なスタートを切ることができました。普段は日本には疎遠と思われている「イスラム」を取り上げ、皆様の文化に対する疑問やあるいは不信をいかにして解いていくかの糸口にしたいと考えたわけでございます。

つまり、西側の驚異としての「イスラム原理主義」論や、西側の価値観とは相いれないイスラム世界と西洋間の「文明の衝突」論の出現などに鑑み、イスラム理解の一助として、基本的な知識、西側の価値観とイスラム世界の同質的な共通点の解明などを目指したいと思います。

4回シリーズのうち、5月に開催いたしました第1回は、イスラムについての概論を慶應義塾大学の湯川先生のお話しいただきました。そして、本日は第2回でございますが、今回は「紛争とイスラム」について学んでいこうと考えております。

イスラム自体は国際社会にとって「驚異」であるのか、あるいは、イスラムがもつイメージとしての「紛争」とは何を意味しているのか、など、ますますイスラムと我々の文化の差異と同室を考える上で、面白いテーマを切り口として探ってまいります。

なお、第2回の本日は、講師に国際大学大学院国際関係学教授の小杉泰先生、モデレーターは第1回と同様、東洋英和女学院大学社会科学部助教授の池田明史先生にお願いしております。それでは、よろしくお願いいたします。

第1部　小杉教授の講演

はじめに

池田　おはようございます。イスラム朝食会として第2回目となるわけですが、第1回目は湯川先生をお招きして、予科としてイスラムの内容を概説していただきました。今回から本科に入ります。特に今回は我々の最も関心のあるところかと思いますが、紛争というものをイスラムがどのように考えているかということを中心に、小杉先生からお話を承りたいと思います。

初めに小杉先生のご紹介をしたいと思います。先生は東京外国語大学を卒業されたあと、すぐにエジプトに渡られました。その後、イギリスのケンブリッジ大学でも研鑽を積まれ、現在は日本におけるイスラム政治思想史研究の第一人者と目されている方です。特にご紹介申し上げたいのは、エジプト留学に際してアル・アズハル大学という世界で最古の大学を卒業されたということです。アズハル大学は10世紀の後半にはすでに存在していたという古い大学であり、私の知る限りでは、日本人でアズハル大学の法学部を出られたイスラム研究者というのは小杉先生をおいて他にいないと思います。今では日本人が入ることすらむずかしい、イスラム法学の最高学府を出られたという希有なご経験をお持ちです。

この朝食会では基本的な問題の立て方として、「イスラムは問題だ」という議論と「イスラムは解決だ」という両極の議論がありますが、そういう立て方が正しいのかどうかも含めて、その中にある様々な考えを見ていこうということで催されております。中でもこの「紛争」というのは、イスラム脅威論との関係で「イスラムは問題だ」という立場からのアプローチが多いわけですが、それに関して小杉先生からのお話をいただきたいと思います。ではよろしくお願いいたします。

小杉　おはようございます。ただ今ご紹介いただきました小杉です。本日は「紛争とイスラム」について、ニュースを見ていると「紛争のイスラム」ではないかという気もいたしますが、その辺のお話をしたいと思います。

脅威・紛争のパーセプション

私はエジプトに長く行っておりまして、アラブ世界が研究の対象です。アラビア語を使っている国や使っている人々ですね。イランなどでもものを書くときにはアラビア語で書く人がたくさんいますので、その辺も含みます。イスラムといっても中東、中でもアラブ圏が私の素材です。研究を始めてから満25年経ちましたが、始めた頃に比べれば日本でもアラビア語を学ぶ人が増えました。しかし、国連の公用語だということを考えるとまだまだだなという気がします。私の大学でも、また他で講義をするときにも、若い皆さんにアラビア語を学ぶようにすすめております。私の授業は「現代中東政治」や「現代のイスラム」などというものであり語学ではないのですが、簡単だからやってみなさいと言っています。すると皆さん疑わしそうな顔をするんですね。じゃあここでちょっとやってみましょうということになります。まず日本語の「あなた」はアラビア語で「アンタ」です。すると皆さん、「これは簡単かな？」という顔になります。「私」は「アナ」と言いますが、「アナ　コスギ」というと「私は小杉です」という意味になります。動詞がないのですが、りっぱな文章なのです。

実際はもう少しめんどうくさい言葉ではあるのですが、日本でアラビア語を学ぶのがむずかしい理由の1つに教材がないことがあります。辞書もまだ充分ではありません。しかしそれだけではなく、発想法が違うことが大きいと思います。言葉というものは文法が分かれば分かるというものではなく、特に

アラビア語には、日本人から見た異質の発想があると思います。その発想は、コーランの発想であると言っていいと思います。イスラム圏にはアラビア語以外の国が多々ありますが、コーランは翻訳できないものです。意味の解説はいくらでもできますが、それはコーランではありません。インドネシアでもナイジェリアでもコーランはアラビア語なのです。ですからイスラムが世界に広がっていくことは、世界をコーラン的論理、アラビア語的論理で染めていくような側面があります。そういう論理の異質さが摩擦を生むのではないかと思います。

大昔のように離れて住んでいた時代はよかったのですが、国際化が進んであちこちで接触するようになると発想の違いが引っかかってきて、異質論が出てくるのだと思います。しかしそこには分からないから「異質だ」と言う側面があって、そういうレッテルを貼っていく。そして「イスラム原理主義」という言葉が出てくるのではないでしょいうか。「イスラム原理主義」という言葉がニュースで使われ始めたときに私が思ったのは、何か事件が起こると「犯人は分からないがイスラム原理主義者のしわざと思われる」というような、そういった何か危ないイメージでばかり使われるということです。危ないことをするのは原理主義者だと言うと、みんな納得してしまうようなイメージがあります。

20世紀の初めにはイスラムが薄れていったのですが、たしかにここ最近イスラムが世界に広がりつつあります。しかしニュースになるのは危ない話ばかりです。あたりまえですが、「本日もアブキール村では普段と同じように5回の礼拝が行われました」というのはニュースにならないわけです。そうするとニュースで作られるイスラムのパーセプションは脅威であり、トラブルになったときだけ出てくるという側面があります。

脱冷戦後の敵？

それともう1つは、冷戦が終わり世界が平和に向かっている中で、冷戦期の二元論、敵か味方かという見方ですが、新しい敵としてイスラム原理主義があり、これが世界を脅かしているのだという見方があります。たしかに現在イスラム圏ではあらゆる紛争が起きています。しかしそれとイスラムが関係あるのでしょうか。単純に言うと、脅威だと思っているのは誰なのかということと、脅威が起こるときにどちらから見ているのかということだと思います。

挑戦者としてのイスラム

ボクシングを例にすると、今チャンピオンはアメリカです。そこに突然強い見知らぬ挑戦者が現れたから、それを悪く言っているみたいな状況ではないでしょうか。つまりイスラムには挑戦の側面が多々あるということです。イスラム世界は、欧米など発展国が率いている世界の体制に異議・不満があるわけです。だから挑戦している。挑戦しているから脅威だというのは、チャンピオン側に寄りすぎた見方だと思います。果たして挑戦が悪いことなのでしょうか。

イスラム世界は西洋近代文明に挑戦しているわけですが、21世紀の文明を考えると、これまで通りにいけばいいというのではありませんから、色々な考えが出てくるのはいいことだと思います。そのときに摩擦が両側から起こるわけです。新しい考え方が出てくると、既存のチャンピオンとしては座を脅かされないように叩くわけです。イスラム世界が、イスラム的な秩序を広めたいということですめばいいのですが、クゥエートにイラクが攻め込んだ湾岸戦争でも、石油の安定供給の問題があるために我々は介入せざるを得なかったわけです。つまりイスラム世界の下からの挑戦と、国際社会の上からの介入という両方向からの摩擦が、紛争の大きな原因になっていると思います。

ネガティブな近代と黄金の中世期

では、イスラム世界はなぜ西側世界に挑戦するのか。共産主義が衰退し、世界が今のようなあり方で落ちついているときになぜ挑戦するのかということ

ですが、近代に対する彼らのイメージと我々のイメージがものすごく違うということがあります。我々は近代はいいものだというイメージがありますが、イスラムにとっての近代は植民地化され、分割された時代であったので、反発があるわけです。そういったネガティブな近代を何とかしたいという思いと、その前の時代は大変栄えていたのだという思いがあります。歴史研究者の間には、国際社会は8～9世紀のイスラム王朝と共に始まったという議論がありますが、昔は自分達が国際社会を担っていたという意識があるわけです。それが落ち込んでしまった、西洋近代文明に負けたわけですから、それを何とかしたいと思っています。

また彼らがよく言うのは、ルネサンスは我々が教えたのだということです。たしかにルネサンス前のヨーロッパは遅れていたので、イスラムから多くのことを取り込みました。当時ヨーロッパ人がイスラム文明にどれくらい熱狂したかというと、コーヒーがアラブ圏で発明されヨーロッパに伝わり、あっという間にカフェ文化ができたことからも分かります。砂糖もアラブ圏から伝わったわけですが、当時のヨーロッパ人は「これこそ文明の味だ」と言って熱狂しました。そこからサトウキビの工場などができて、文明が発展したという議論があるぐらいです。このように、イスラム圏がヨーロッパに近代の初めのところを教えたんだ、しかし競争しているうちに負けてしまったんだという思いがあるわけです。だから何とかもう一度頑張りたいという思いがうずまいています。私が現地へ行ってすごいなと思うのは、経済的に大変な地域も多いんですが、そういうアイデンティティがものすごく強いことです。

近現代の中東－３つのベクトル－

では彼らはどうしたらいいのか。１つは西洋化すること、２つめは民族主義で頑張る、３つめはイスラムを復興させるということです。過去100年くらいを見ますと、最初は西洋化でいこうとして頑張ってみたがうまくいかなかったので、今度は民族主義で30年くらいやってきた。しかしそれもうまくいかないので、ここ20年くらいはイスラム復興が出てきています。常にこの３つが大きくあるんですが、波があるように思います。100年くらいを見ていると上がったり下がったりしていて、今回の波は３回目くらいかなという感じがします。アラブ民族主義も上がって下がるまで半世紀ぐらいありましたので、イスラム復興運動もまだあと30年ぐらいは続くと思います。

西洋化の論理は西洋を模倣すればいいのでわりと分かりやすいし、日本もそれでやってきたつもりでいましたが、実はそこには日本独自のやり方があったからこれだけ成功したと言われています。現地に行くと、日本がなぜ近代化に成功したかを話してくれとよく言われますし、最近は東アジアの話をしてくれと言われます。もう西洋モデルはだめだと言うわけです。彼らは「日本の文化は固有のアイデンティティがある、そしてそこには近代があり、現代的なテクノロジーが駆使されている」と言います。彼らもそういうものを作りたい、イスラム的近代の夢を果たしたいというのが、ここ100年ぐらいの議論だと思います。

そこにはイスラムがなければいけないし、近代もないといけません。昔の人は啓示と理性、あるいは宗教と文明を合わせるのだという議論をしたわけですが、そういう形で合わせていかなければなりません。その場合のイスラムとは何なのか。イスラムは政教一致だとされていますが、私はちょっと違うと思います。そもそも政教一致とは、あらかじめ政治と宗教を分けた上で一致だと言っており、それはどちらかが一方を取り込む形で一致しているものです。しかしイスラムには、分けるという発想が元々ありませんし、分けるという意味も分かっていません。イスラムが全てに適用されるのがイスラムであり、宗教はイスラムでやって政治は他のことでやるというのはできないわけです。それをやりたいというのですが、そんなことが果たしてできるのでしょうか。そういった未果てぬ夢をここ１世紀半ぐらい追い続け

ています。

それはアラビア的発想、コーラン的発想といった原点に戻る、つまりはコーランに戻るということです。コーランは7世紀にできた書物ですから、7世紀に戻るなんて全くのアナクロだと言われるかもしれません。しかしここが誤解の元で、できたのは7世紀ですが、毎日読んでいますので中味は別に古くはなく、時代に合わせて解釈すればいいのです。コーランに合致した近代であればいいというのが彼らの議論です。どのようにして7世紀と現代を合致させるのかというと、コーランというのは非常に曖昧模糊とした原則が色々書いてあって分かりにくいのですが、非常に解釈の余地がある本です。ですから現代的なことをいくらでも盛り込めるのです。

イスラム法の復活・再適用

そのようにしてできているのがイスラム法ですが、イスラム法を適用すればイスラムになるというのが彼らの考えです。このイスラム法というのは日本の感覚で見るとすごく変な法律です。これは国会などで制定するわけではなく、コーランやハディースを読んで法学者が答えを言うという法律です。そんな法律は現代にはありえないと言われますが、イラン革命のときにホメイニさんが出てきて、「シャー（王様）王様をやっつけるのがイスラムの道だ」と言ったらみんなでデモを行うといったような、とんでもない世界が存在するということが20年前に分かったわけです。

私は今、イスラム法がどうやって適用されているのかを調べています。それもホメイニさんのような偉い方の世界ではなく、「イスラム身の上相談所」と呼んでいますが、庶民の質問に法学者が答える場があり、そこについて調べているところです。エジプトにもそういうところがあって、話の中身がまさに身の上相談なのです。エジプトにももちろん法律がありますが、法律とイスラム法が違うということが多々あります。法律で決まっているのならそれでいいではないかと思いますが、イスラム法ではどうなっているのか、それに合っていないと自分はいやだという人がけっこういて、相談にやってくるわけです。法律よりもイスラム法の方が正しいという考えがあるというのが不思議なところですが、それがイスラム復興の元種ではないかと思います。

そこで私は法学者の隣りに座って相談者の話をずっと聞いているわけですが、何人かいる法学者にも人気・不人気があって、相談を待つ人の列の長さが違ったりしています。相談内容としては結婚・離婚に関する問題が多いようです。イスラム法では契約を重視しますが、結婚も民事契約の1つであり、口頭で離婚すると宣言すれば離婚が成立します。エジプトでは3回まで離婚できますが、その後はもう結婚できません。その場合、離婚した妻が他の人と再婚して離婚された場合にのみ、再び結婚できることになっています。わりと離婚が簡単なので3回離婚してしまった人も多くいますが、元妻を他の男と結婚させるなんていやだ、どうにかならないか、などという相談があったりします。答える法学者も、だめなものはだめだと言い切る人と、長々と説教する人と様々です。イスラム法は様々に解釈でき、法学者がその力を持っているというのは変な話ですが、問題解決型の法律であると言えます。何か問題が起こったときに、どう解決すればいいのかを柔軟に解釈できるのです。それを現代型に作り変えようということで今やっているわけですが、どこまで現代化できるのかは微妙です。

近代型のイスラムーイスラム銀行ー

非常に面白い例としてはイスラム銀行があります。イスラム銀行は無利子金融を謳っていますが、そもそも銀行が無利子なのは言語矛盾だと言って初めは笑われました。でき始めたのは75年頃なので20年ぐらい経ちましたが、今世界中に180行ぐらいあると思います。20年間で180もできたわけですから、成功したと言えるでしょう。無利子金融というのはどういう仕組みかといいますと、事業が成功するか否かにかかわらず融資する際に固定の金利を付ける

ものをイスラムでは利子と呼んでいますので、このような利子は付けず、事業が成功した場合に利益の何パーセントかを銀行が受け取るというものです。無利子といっても利潤を取らないわけではありません。最初に固定の利子を決めないということです。ですから預金者に対しても利子を何パーセント払うという約束はしませんが、かといって払わないわけではありません。以前のイスラムでは銀行は利子を取るからいけないと言って話は終わっていましたが、それでは世界は立ち行かないわけで、近代的な経済を遂行するためには銀行が不可欠ですから、イスラムと銀行を合わせた形のイスラム銀行というものを作りました。そういった形で、イスラム型の近代を作ろうとしているわけです。

宗教革命

こういった銀行のようなものは全く問題はありませんが、イスラム復興の中にはわりと対立的な問題もあります。1つは宗教復活のための革命です。イラン革命がありましたし、アフガニスタンでは反ソゲリラもやりました。イラン革命では大使館占拠事件を起こしたのでアメリカと非常に仲が悪くなり、アフガニスタンではソ連が敵でしたから逆にアメリカが応援したというのがありましたが、どちらにしても宗教革命ですから、本人達は資本主義も共産主義にも反対だという立場で戦っています。以前は共産主義は無神論だからいけないと言っていましたが、最近は世俗主義だからいけないという議論に変わっています。西洋近代文明は世俗主義であるとしていますからぶつかりますし、政教分離もいけないとしています。

民族主義との対立

もう1つは民族主義です。イスラム世界は1つで、マレーシアもナイジェリアもない。国があるのはかまわないが、国同士で争ったり、ナショナリズムはいけないというのがイスラムの理論です。イスラム世界は近代化が入ることでいろんな国民国家が成立していますので、そこに対立が起きています。

クルド問題がそのいい例です。クルド人はイラク、イラン、トルコあたりで非常に苦しんでいますが、イスラム世界を解体して民族ごとに国を作ったときに、クルド人だけ国が作られませんでした。しかしクルド人はオスマン帝国に多くいまして、役人や軍人の仕事に就いていた人もたくさんいました。イスラムで一番偉いムフティという職がありますが、今シリアでそれをやっている方がクルド人です。イスラム世界が1つのであればクルドもアラブも関係ありませんが、国ごとに分けられてしまうと、クルドはわけの分からないマイノリティになってしまうわけです。わずか半世紀の間にそういう悲劇が起きてしまいました。そうなると、当然クルド人の国を作ろうということになって摩擦が起きますし、そこに大国が絡んでくるわけです。

ではイスラムは宗教を元にしたシステムにするのか民族にするのかということになりますが、民族は宗教内に分立をもちこむのでいけないという議論ですので、近代型の民族をやめて宗教にしようとすると摩擦が起こるというわけです。

急激なシステム変容－不安定化・矛盾の蓄積

イスラム的システムというのはわりと安定性がありまして、12世紀間ぐらいは中東で安定していましたが、ここ2世紀ぐらい非常に不安定化しています。それはイスラム的システムに西洋的システムを持ち込んできたことによるものです。日本の場合は、西洋を取り入れるときに取捨選択して入れたわけですが、イスラム世界の場合は植民地化されて、好き嫌いにかかわらず西洋が入ってしまった結果、現実と合わないものがたくさんあるわけです。それを直したいということでいろいろやっているわけですが、直すときに下から新しいシステムに変えようとすると革命になります。イランなどは一番いい例で、あれはイスラム革命だったわけです。イラン革命が起こったあと、今時こんな馬鹿な体制は長く持たないとか、

政教一致などおかしいなどと言われましたが、私はそう簡単にはつぶれないと思いました。それはイスラムだからということではなく、革命が起こると社会矛盾が吹き出しますのでけっこう長持ちするんです。

しかし中東には、革命が成功しないということがままあります。システムを変えようとする革命勢力が出てくるとそれを潰す勢力がすぐに出てきて、革命勢力が勝ちそうになると近隣の国が介入するからです。レバノンなどは一番いい例で、勝負がつかずに内戦が延々15年も続きました。その理由として、紛争を解決するシステムが欠如していることがあります。昔のイスラムでは紛争解決システムがうまく機能していましたが、近代型のシステムと折衷型にしたらうまくいかなくなってしまい、今はどちらにも行けない状態になっています。もっと民主的にやればいいと思いますが、民主的プロセスにはなかなか行きませんし、そうなったとしても民主的プロセスというのは1つのシステムですので、2つのシステムが争っている状態を解決するシステムではないわけです。イスラム世界というのは、どっちでもいいんですが、どちらか1つのシステムにならないことには紛争が続くのではないかと思います。

過去2世紀ぐらいの経験から言いますと、30年前ぐらい前までは西洋化をどんどん進めて近代化すればいいという議論だったのですが、昔から続いているイスラム的システムに西洋型をはめてみたらうまくいかず、イスラムというのはそう簡単にはつぶれないことが分かってきたのがここ20～30年ぐらいだと思います。なんとかイスラムと近代がうまくくっついたような仕組みに変わらないと、世界の安定は起こらないでしょう。

文明の重心の移動

では中東はどうなってしまうのでしょうか。最近思うのは、アジアイスラムはわりあい発展しているということです。マレーシアやインドネシアですね。ここは紛争もありません。経済発展はするが、イスラムも主張するというようなイスラム型近代がうまくできています。アジアイスラムがうまくまわった場合に、イスラム型近代の手法パターンが見えてくるのではないかと思います。

先ほど申しましたように、中東に行くと日本の次に興味があるのはマレーシアで、なぜイスラム国なのにマレーシアはあんなに発展しているのかとよく聞かれます。アジアイスラムが勃興してくると、それに引っ張られて中東がもう一度そちらへ向かう可能性があると思います。イスラム圏というと何となくアラブや中東が中心のような気がしますが、歴史を見るとイスラム圏は重心がいつも動いています。アラブが重心だったのは最初の3世紀ぐらいで、そのあとはイランが勃興したり、トルコ人がのしてみたり、クルド人が活躍した時代もあるというように、重心がアジアに来ても少しもおかしくないわけです。

イスラム復興の可能性
中道派の勝利と対話型改革が道を開く

それと中東でも先ほどお話ししましたイスラム銀行とか、草の根レベルの福祉活動が大変盛んです。テロをやっているような過激派もいますが、こういった中道派、近代型の社会をイスラムに沿って作るんだと言っている人達が強くなってくれば、彼らは対話型の改革派ですから話し合いもできますし、発展の可能性もあります。内戦や戦争をやっている限り発展はありませんから、中道派がどれぐらい伸びるのかがポイントです。

しかし今中東諸国では、中道派が両方から攻められている状態です。一方はイスラム過激派、一方はイスラム復興を潰すという姿勢の政府です。国は一応西洋型でできていますから。このように西洋化モデルとイスラム過激派の間で、イスラム的近代派（イスラムはやるが過激にはやらない、近代はやるがイスラムもやるという人達）が挟み撃ちにあっているのが現状です。テロは西洋化オンリーの路線と過激派の間で起こっており、これが何とかならない限り紛争が続くと思います。

トルコでは軍部が西洋型を進めていますが、先日辞任したエルバカン首相の福祉党などは中道派で、彼のような「民主主義で選挙をやって政権を握ろう」という人達がたくさん出てくれば、もう少しシステムが安定してくるだろうと思います。ところが、それを無理矢理つぶすようなことをやっているから過激派が出てきてしまうのです。今の紛争の形はそういった三極になっているという気がします。このように、イスラム世界はシステムが安定するまでにはまだ時間がかなりかかると思います。

第2部　質疑応答

池田　ありがとうございました。非常に複雑で錯綜したお話を平明に例を交えながら解説していただきましたが、簡単に解説していただいても複雑なものは複雑で、色々と頭の混乱する内容の多いテーマではあるわけです。これから質疑に入りますが、口切りとして一言述べさせていただきます。

小杉先生のお話の最初に「原理主義という脅威のレッテル付け」というお話がありました。要するに中東のあちこちで革命やテロが起こる。何かよく分からないがドンパチやっている。そういった正体不明の理解できない事態が起こると、今の国際秩序に責任を感じている人達、特に欧米の今の国際秩序を作った人達から見ると非常に不気味に見えるわけです。

人間というのはどんな場合でも、正体不明のものに対してとりあえず名前を付けようとします。名前を付けることで自分達の認識のパラダイムの中に取り込んで、分かったつもりになってとりあえずの安心感を持とうとする。それは何も国際問題に限ったわけでなく、あらゆる場面でそうなんです。ポストモダン、モラトリアム人間、クロワッサン症候群、シンデレラシンドロームなど、何のことか分からない名前がたくさんあるわけですが、とりあえず名前を付けてしまうんですね。その典型的な事例がこの「イスラム原理主義」という言葉だと思います。よく分からない現象が起きていることを取り上げて、だから脅威なんだと短絡させない必要があると思います。しかしそれは名前付けをする側の留意点であって、だからといってそれが本当に脅威ではないのかという問題とはまた別だと思います。脅威か脅威ではないかについては、小杉先生のお話では「挑戦であることには間違いないが、挑戦であることが脅威に結びつくかどうかはもう少し考えてみる必要がある」ということでした。

もう1つここで考えたいのは、挑戦者というのは基本的に攻める側のはずですが、どうも今の原理主義を巡る状況を見ていると、欧米の側もイスラムの側も非常に守勢意識というか、どっちも自分達が攻められているという意識で凝り固まっているように見えるということです。イスラム原理主義を国際秩序に対する挑戦ととらえる欧米の守勢意識は我々が知っている通りですし、イスラムの側から言うと、たとえば近代化の日本モデルと比べる形でイスラムモデルがあり、未果てぬ夢であるというお話がありました。日本の場合は黒船が来航して、ウエスタンインパクトがやってきた開国前夜のあの時代を考えると、まず何が目に付いたかというと相手の強さなんです。西洋の圧倒的な強さにまず目が行って、相手の力を取り入れないと負けるというところから始まったわけです。しかしイスラムの場合は、まず西洋の衝撃が来たときに相手の強さではなく、自分達の弱さに目が行きました。相手の強さと自分達の弱さというのは、同じコインの裏表のように見えるが実はかなり違うことなのではないか、自分達がこんなに弱くなってしまったのはなぜなのかという強い自己批判に向かってしまったことが、実はモデルを分けた分水例なのではないかと思います。

初めに私から若干の質問をさせていただきたいのですが、1つはコーランというのは毎日読み継がれており、現代的な解釈の余地があるものだというお話でしたが、そういった解釈は学説のように積み上げられるものなのか、それともその解釈がきかなくなると全て捨ててしまって元に戻ってしまうのか、どちらなんでしょうか。

もう1つはイスラムは民族を否定的にとらえるというお話でしたが、イスラムにとって個人というものはあるんでしょうか。イスラムの中の市民権、あるいはイスラムじゃない人達との関係、人権のとら

え方についてお聞きしたいと思います。

小杉　最初のコーランの解釈の学説についてですが、そういったことは学者の間だけのことであり、普通の人には関係ありません。コーランの解釈を聞いてそれを実行するのはそういった普通の人々です。ですから、歴史上でどのように解釈が変わってきたかというと、普通の人々が最も納得する解釈が勝ってきたわけです。

イラン革命の時も、国民の間にシャーに対する不満が鬱積していた所にホメイニが出てきて、「これはイスラム的にいけないからシャーをやっつけよう」と言ったから民衆が飛びついたわけです。ホメイニが言ったことは、その前の学説から言うとかなり革新的でした。革命がいいとか、イスラム共和制という言い方もイスラムと近代の折衷だと思いますが、「ムハマド時代の教えに従って生きれば今は共和国だ」みたいなことを言ったわけです。そんなことはコーランには書いていませんが、そういう解釈が受けるわけです。ですから繋がる場合も、断絶する場合もあります。

基本はみんなが納得する解釈が勝つということで、学説が支持される学者にパワーが備わるということだと思います。ですから学説的には非常に正しくて学者間では尊敬されているが、普通の人には人気がないという学者もいます。イスラム世界も現代に生きていますから、現代人の抱える問題にうまく答えなければいけないわけです。

２つめの個人の問題ですが、これは国家との関係が一番大きいと思います。歴史を見るとイスラム国家という言い方があります。昔は王朝でした。基本的に言うとイスラムは小さな政府がモデルだと思います。政府は領土防衛と秩序の維持をするだけで、あとは国民に自由にさせておくというものです。

イスラム法には契約法などいろいろありますが、法学者が解釈をして確定すればそれが守られるわけですから、無理矢理政府が執行したりすることはありません。契約は当事者が合意してそれがイスラム法に合っていれば、あとは公証人に届け出るだけで成立します。実際問題として、うかつに契約の内容を政府に知られると財産の中味が分かったりしますから、昔はできるだけ政府に関わらない方がいいとされていました。イスラム法は政府がなくても執行できますし、政治以外のこともたくさん扱いますので、個人はそこで守られていると思います。イスラム国家というのはどこの王朝でもそうですがけっこう悪いこともしますので、むしろイスラム法が政府に抵抗する武器になるわけです。

近代というのは国家機構の膨張の時代だと思います。それはイスラム諸国だけではなく先進国も同じで、どこでも行政機構の肥大の問題があります。イスラム諸国では、民族主義や社会主義をやっていた時代に大きくなりました。それが今の一番の問題だと思います。アラブ社会主義をやったり、産油国型福祉国家を作ったりしていますが、どちらにしても政府が大きくなっています。

イスラムに個人や人権の概念があるかという議論は今盛んに行われていますが、イスラムにその概念があっても、政府がイスラムを守っていないという問題があります。政府は西洋型をとっており、中にはイスラムを主張する人もいますが、どっちにも決まっていないというのが問題だと思います。下手をすると両方の悪いところをとるわけです。西洋型の政府にするけれども、人権は守っていないというのが問題だと思います。イスラム復興を論じている人達は西洋近代をよく分かっていますので、うまく協調しながらやっていくしかないでしょう。

庶民は人権を守らない政府、経済発展をうまくできないだめな政府にうんざりしています。もう少し政府の領域を制限して、普通の市民社会が自由に動けるようにならないと、この問題も解決しないと思います。またイスラムも、そういう人達が納得する解釈をしないと生き延びませんので、当然人権も市民の自由も出て来ないといけないでしょうし、そういう解釈だけが21世紀に残っていくだろうと思います。そうでなければ、社会主義と呼ぼうがアラブ主義と呼ぼうがイスラム復興と呼ぼうが、誰も受け入

れいないでしょう。

池田　ありがとうございました。では皆様からのご質問をお受けいたします。

歌川　日本財団の常務理事の歌川です。どうもロジックがよく分からないのですが、分からないということはよく分かったような気がします。分からないままにお聞きしますが、たしかムハマドという人は平等性を強く言っていました。ムハマドの時代は石油は商品ではありませんでしたが、たとえばサウジアラビアで王様が石油の利権を持っていて、福祉も多少はやっているんでしょうが、あとは出稼ぎの人が働いています。これは不公平ですよね。仏教ではそういうつまらないことを考えるのは「業」であり、だからお前は成仏できないんだと説明するんですが、イスラム法学では富の偏在、貧富の増大、地球は不公平だということはどのように解釈されているのでしょうか。

小杉　私は平等だというのは２つあると思うのですが、１つはイスラムは貧富の差があっても人を平等にする側面があると思います。お金があるから偉いんではないという考え方です。私はエジプトで乞食に呼びつけられて金を要求されたことがありますが、それぐらい平等だということです。その乞食は金持ちに対して少しも臆していません。尊厳は同じということであり、宗教的な教えとしてそういったことがあるわけです。ですからイスラム世界では、サウジ人がいくら金持ちでもちっとも偉いと思わないということが非常に大切な側面だと思いますが、それがある程度貧富の差を緩和するということがあると思います。

また今福祉運動が大変盛んですが、福祉をやるというのは同胞が助け合うという思想ですから、お金がある人は施しをすればいいということです。救貧税と訳されたりするザカートというのがありますが、お金を持っているとそのうちのいくらかを出さなければいけないというもので、もらう方は施しを受けていると全然思っていません。イスラム法を読むと、払う分は神の権利であると書いてあります。神の権利だからその人の財産ではないのだ、儲けたらその分は人にあげなさいという考え方です。

一方で、貧富の差がある程度あるのは仕方がないが、イスラム法に反することをして儲けてはいけないという規則があって、それが不当な貧富の差を生まないようになっているというのがイスラムの主張です。ですからサウジの問題はものすごく批判があります。石油は誰のものでもなく神がくれた財産ですから、サウジの王様が独占しているという問題だけでなく、そもそもなぜサウジ一国が独占しているのか、イスラム世界の他の貧しい国にも回すべきだという意識があります。その意識はイスラム法の教えから来ており、恩恵に預かっていない人はみんな思っています。

そういった不満が最も強烈に出たのがイランです。革命になるぐらい不満が高まったわけです。サウジアラビアはイスラムを執行していると言われていますが、サウジ人はイスラム法は我々にしか適用されないと言います。サウジには王族専用の飛行場があり、一般の人はさんざん待たされるのに王族だけがフリーパスで通っていきます。そういうことはみんな知っています。エネルギーの安定供給のためにも、サウジはもうちょっとイスラム化しないとあぶないのではないか、イスラム法を適用すると言うのならみんな平等にやらないと、いつか不満が爆発するだろうと思います。これは単なる危惧ではなく、あちこちで兆候が出ております。

結局はすべて限度の問題だと思います。多少不正があってもそのことで人間の価値は変わらないという思いがある限り、ある程度は許すと思います。また、ちょっとでも格差があるだけで不満に思うようでは社会は安定しませんので、それをうまく安定させるのも宗教の１つの機能だと思います。しかし早くイスラム法にのっとった分配をしないと、どこまでみんなが我慢するかは疑問です。

山本　日本国際交流センターの山本です。日頃お金をいただくのは当たり前だというような顔で、日本財団や笹川平和財団からお金をいただいております

が、恩は忘れない日本人的な面もあります。こういったお話を理解しようとするときに自分のパラダイムに取り込んで理解しようとするため、的外れな話になるかもしれませんがお許し下さい。

実は私はキリスト教徒で、カトリックでリベラル派です。コーランと聖書を比較しますと、今のキリスト教、特にカトリックの世界はだらしなくなっていまして、妥協的であり普遍性を重視しております。キリスト教では50年代の後半ぐらいにセキュラーシティ・ディベートというのがありまして、神の国とか、怒りの神とか、十戒から、神の愛とか、コミュニティとかを重視すべきだというように移っていき、いまだにその議論があるわけで、どうしようもなく古いのが今ローマにいるわけです。そういう図式ですが、一般的に教会の権威がだんだんなくなってきています。

最後に小杉先生が今のままではいけない、もっと市民が参加しないといけない、人権が認められないといけないということをおっしゃいました。実際にイスラム世界ではそういった議論があるんでしょうか。少なくともキリスト教の世界では、いまだに一般の信者がローマの権威に異論を唱えるわけですが、そういう現象はあるのでしょうか。

もう1つは、イスラムの方がきっちりとした権威を持っているので長持ちするのではないかという印象があり、非常に矛盾した対立する概念のような気もしますが、私の印象が正しいのかどうかお答えいただけますでしょうか。

小杉　今のお話は宗教権威と教会組織の問題と大変関わりがあると思いますが、イスラムの場合教会組織がありません。法学者も宗教知識があるだけで位置づけはただの人であり、法学者と一般の信徒を分ける規則はありません。

イスラムの場合、教会に相当するものは何かと考えますとウンマ、イスラム共同体だと思います。イスラムの信徒は今10億人いますが、その10億人が1つのウンマなのです。イスラムには共同体無謬説というのがありまして、ウンマが一致するときは間違いではないというものです。あたりまえといえばあたりまえなのですが、その権威というのは非常に強いもので、ウンマが一致していれば誰も反対できません。よく考えてみるとなぜコーランに権威があるのか、そもそも誰がこれをコーランだと決めたのか。それをたどっていくとウンマに行き着かざるを得ません。ウンマが統一して、これがコーランだと決めたということなのです。つまりウンマの権威の方がコーランよりも強いということで、みんながそれを信じているからそれがコーランなのだということです。ウンマの権威は無謬ですから、権威が強いとおっしゃったのはそういうことだと思います。

問題は教会組織がないので、意見を統一する場がないことです。逆に言うと教会と一般信徒が対立することもないわけです。そうすると一度コンセンサスが成立すると強いのですが、コンセンサスの統一に非常に時間がかかります。そこが今の問題だと思います。現代におけるイスラム法は何かということのコンセンサスがなく、非常に多くの議論があります。市民の権利や自由についても議論がありますが、これだけ広いイスラム世界でコンセンサスができるには半世紀から1世紀はかかります。ただここ100年ぐらいの間に、イスラム復興のコンセンサスがかなりできてきたという感じがあります。イスラム銀行などの話をしましたが、100年ぐらい前に問題になっていたことが解決して、コンセンサスができているものもあります。今もめている問題についてはまだ時間がかかると思います。

それから人権については大変むずかしい問題で、あるともないとも言えると思います。人権というのは自然権で、人間が本来持つ権利です。イスラムには権利のコンセプトはありませんが、かわりにホルマという禁止事項があります。たとえば生命は不可侵であるとか、財産は不可侵であるというような、侵してはならないというコンセプトです。それは西洋型の人権と対応すると思いますが、、コーランのコンセプトで言われたときに初めて納得するというものです。市民的自由もコーランのコンセプトで言わない

と納得しないでしょう。西洋化されたインテリは西洋的コンセプトをそのまま入れようとするのですが、やはりそれでは回らない異質な論理になっています。その議論は大変盛んに起きていてまだ動いていますので、20年ぐらいは続くと思います。その中でも、ウンマに権威があるということについての異論はなく、みんなが認めることです。ただ誰がその中で指導権をとるのかについてはもめるということです。

山本　コンセンサスができるというお話ですが、コンセンサスが普遍的な価値観に合致するのでしょうか。もし反対の方に行くと、10億の民がゴリゴリの価値観で固定されてしまうわけですから、いくつか派閥があって、色々な考え方が見える方が我々は安心できると思うのですか。

小杉　それはイエス＆ノーだと思います。ノーの方はイスラム世界は挑戦していますので、自分達が納得する論理の普遍しか認めないということです。西洋的普遍に一致するところはたくさんありますが、押しつけられたものは認めませんので、そこが今出てきているだろうと思います。

イエスの方は、人間というのはイスラムもキリスト教でも日本でもアラブでも、同じ現代に生きる人間であればコンセンサスはだいたい穏当なところに落ちつくのではないかという楽観論です。むずかしいのは、人権でも市民的自由だとか職業選択の自由などについては異論が出ないのですが、一番もめるのは宗教選択の自由を認める気がないというところです。イスラム教徒以外が何をしてもかまわないのですが、イスラム教徒が改宗する自由は認めていません。これがどこへいくのか微妙です。

歴史的背景を見るとヨーロッパはそれが普遍的自由だと言いますが、イスラム世界の理解はネガティブな近代ですから、植民地化した上でイスラム教徒をキリスト教化させようとする陰謀だととるわけです。イスラムにとっての宗教的自由とは、イスラム教徒がイスラム教徒でありつづける自由だという議論になってしまうわけです。その辺の歴史性が清算されるためには、お互いが対等な立場にならないといけないと思います。池田先生がおっしゃったように今は両方に被害者意識がありますから、それが解消されるまでまだ20～30年はかかるでしょうが、それが解消されれば落ちつくところに落ちつくのではないかと思います。

吉村　早稲田大学の吉村です。本日言及がなかったことですが、イスラエルとの戦いがありますね。今日のお話の中で、西欧社会とイスラム社会、またイスラム社会の中の原理回帰と西欧化という紛争・軋轢についてはよく分かったのですが、イスラエルとの戦いはそういうコンセプトと少し違うような気がします。それを先生はどのように解釈されていますでしょうか。また、結末はどのようになっていくのでしょうか。

小杉　アラブ・イスラエル紛争はイスラム復興の方から見ると、イスラエルが1948年にできて、30年ぐらいは民族問題で推移していたと思います。イスラム世界を分割したときに、パレスチナにイスラエルというユダヤ人の国を作りました。そこでパレスチナ人は自分達の国ができなかったから、国を作ってくれといまだに要求しているわけです。これは民族問題であり、国がないというところでクルド人の問題と似ています。それがここ20年ぐらいですごく変わってきたと思います。つまり宗教化してしまったということです。国際社会は民族問題だった間に民族国家をもって解決すればよかったと思います。そうすればもう少し矛盾は少なかったでしょう。国際社会がこの問題をかなり放置してしまった結果、宗教問題化してしまったわけです。

イスラエルの国内でもパレスチナ人の間でも宗教意識がものすごく出てきて、今和平に反対しているハマース、イスラム抵抗運動組織がありますが、彼らは民族国家ではなくイスラム国家を作らなければいけないとしています。先日もエルサレムに入植地を作るというとみんなが反対したとか、神殿の丘にトンネルを作ったというと激怒して流血の惨事になるとかやっていましたが、これはもう完全に宗教問題です。国際社会にとってはまだ民族問題のままで

すし、91年から始まった和平プロセスも民族問題の枠組みで解決しようとしていますが、現場では宗教問題に転化しているというのが実状です。それも両側で転化しているので、わりと過激な人達がゴリゴリの主張をするような状態が出てきています。民族問題でやってきた人達は、90年代に入る頃までにはお互いに妥協的な態度に変わってきました。ここで解決してしまえばよかったのですが、それができたのはおそらく1980年代の半ばごろまでだったと思います。

これを解決するには、国際社会が違う道具立てを用意しないといけないと思います。日本も90年代になって湾岸戦争以降は中東和平にコミットするようになり、お金も出すし努力もするというようになっていますが、日本は基本的に民族問題で解決する姿勢ですので、私はちょっと道具立てが足りないと思います。もっと二重、三重の仕掛けにしていかないと無理があると思います。過激な主張が両側から出てきている間はだめなわけで、真ん中でほどほどで行くという路線が出てこないといけないのですが、パレスチナでは経済的にも厳しい状態が続いていますから、過激な主張が受け入れられやすいんですね。

現地に行くと何十年も難民キャンプに暮らしている人達がいて、彼らに穏健で行けというのは無理だと思います。穏健で行けというのはこのままでいいだろうという議論ですから、このままずっと難民キャンプで暮らせというわけにはいきません。彼らを中道化するためには生活を良くしなければいけないわけですが、ここ1～2年はいい方向に向いていません。もう少し真剣に経済開発にテコ入れして、かつ宗教性についての認識を持たないとむずかしいかなと思います。

池田　今の中東和平あるいは中東紛争問題については、私も小杉先生とほぼ同意見です。ただ1つあえて展望をつなごうとすると、民族問題で解決するということは、今の中東の様々な問題、特にパレスチナ問題を国家の枠組みで調整しようという試みです。現代の和平プロセスというのは、基本的には今までの民族対決の構造を、国家同志の普通の関係に置き換えていこうとするプロセスです。そのためにはパレスチナ人に国家を与えないと話になりません。国家を与えることで、初めて民族問題としての紛争であるという土俵ができるわけです。土俵を与えずに解決はありえないわけで、土俵を作った上でもなお、国家システムへの挑戦勢力としての宗教勢力が両方の側にあるわけです。それを今小杉先生がおっしゃっているわけです。ですから国家を軸にした安定的な関係を作った場合でも、そのシステムが完全に安定するかどうかはかなり問題をはらんでいるというのは事実です。しかし少なくとも国家を軸にした枠組みを作ることから始めないとどうにもならない。パレスチナ人達に国を作らせる段階である程度のバッファというか、今のような不満の突出が少し引く間隙が出てくるわけで、それをどうとらえていくかということが、パレスチナ和平の今後に鍵になるのではないかと思います。

いろいろと議論が出たわけですが、小杉先生から最後の部分で非常に興味深い指摘がありました。それはイスラム文明の重心が東へ移りつつあるのではないかということです。それもただ移りつつあるだけではなく、移りつつあるということの意味が、今後のイスラム世界と非イスラム世界の関係に融和的な契機を持ち込むチャンスになるのではないかというご指摘でした。この点をふまえてこの朝食会でも「紛争のイスラム」から、やや重心を東に移したテーマを取り上げていこうと考えております。

付　録（小杉教授講演レジメ）

第１回「『紛争』とイスラム」資料

はじめに

1. 「紛争」「脅威」のパーセプション

ニュースになる「イスラム原理主義」、ならないイスラム生活
脱冷戦後の「敵」？
脅威・紛争の根元イメージ＝「イスラム原理主義」というレッテル
西洋近代文明への「挑戦者」としてのイスラム復興
新しいシステムをめぐる戦い・国際システムの介入→紛争の頻発

2. 文明復興の「挑戦」

最初の国際ネットワーク、世界文明の担い手＝黄金の中世期
西洋ルネサンスへの影響
近代西洋との出会い→軍事的敗退、植民地化、負の「近代」
イスラム改革の始まり（19世紀後半）→啓示と理性、宗教と文明
　　近現代の中東→３つのベクトル
　　＝西洋化・民族主義・イスラム復興
現代イスラムの基礎理論の確立（19世紀末から1930年代頃）
　　現実の社会＝西洋化の進展、リベラリズムの実験
第１次高揚期（両対戦間期）→大衆運動の始まり
　　地域的・国際的潮流＝民族主義
第２次高揚期＝1970年代後半～現在

3. イスラム社会の再構築

固有の文化・アイデンティティと近代性・現代性
　　→「イスラム的近代」という夢
政教一元論（トータル・システムとしてのイスラム）
イスラム法の復活・再適用
　　啓典と法学者による「解釈」＝「問題解決型」の法
「宗教革命」としてのイラン革命、反ソ・イスラム・ゲリラ
　　→無神論・物質主義・世俗主義との対立
ウンマ（イスラム共同体）と国際主義→民族主義との対立

4. 中東の現状から

過去200年・100年の中東・イスラム世界
　　急激なシステム変容→不安定化・矛盾の蓄積
革命・内戦・戦争＝国際・域内・国内システムをめぐる争い
「民主的プロセス」の不在か、コンセンサスの欠如か
安定的な域内システムの模索
アジア・イスラムの勃興→文明の重心の移動？
草の根レベルのイスラム復興→福祉活動やイスラム銀行
イスラム復興・中道派の勝利と対話型改革ーその可能性は？